

あわぐらの歴史

旧石器・縄文時代

朝倉の地で人々が生活をはじめたのは、今から一万数千年前の旧石器時代のことです。旧石器時代とは、石を打ち欠いた打製石器を用いて、ナウマンゾウやオオツノジカといった大型動物を狩猟していた時代です。市内の旧石器時代遺跡として原の東遺跡があり、遺跡が台地上にあることから、高台を生活や狩猟の場としていたようです。

縄文時代は、約一二〇〇年前から一万年間続く狩猟・採集・漁労の時代です。市内の縄文時代遺跡は河川に近い台地の上に多く立地し、食べ物となる木の実、シカ・イノシシなどを取りやすい場所にあります。真奈板遺跡や矢野竹遺跡では、シカやイノシシなどを捕獲するための落し穴遺構が多く確認されており、この地域一帯が狩猟場であったことがわかります。柿原野田遺跡では縄文時代前期の首畑式土器が出土しました。丸底で幾何学模様を描くこの土器は、同じ時期の朝鮮半島の土器と類似しています。



甕が出土しており、池の上・古寺墳墓群の被葬者の長にあたる人物が埋葬された可能性があります。甘木公園にはかつて鬼ノ枕古墳があり、高い写実性をもつ馬型埴輪の頭部が発見されました。古墳の石室に使われていた巨石は、甘木公園の忠霊塔付近にある手洗い石に転用されています。

旧朝倉町域には、古墳の石室を彩色や線刻で装飾する、装飾古墳があります。

狐塚古墳（県指定史跡）は朝倉市入地に所在する線刻系の装飾古墳で、石室の複数個所に船や動物などが刻まれています。朝鮮半島



との繋がりが示唆される出土品があったと伝わることから、他地域との交流の可能性が窺えます。湯の隈古墳（市指定史跡）は朝倉市宮野に所在する彩色系の装飾古墳で、石室の奥壁等に赤い顔料で同心円文などが描かれています。

古代（飛鳥～平安時代）

斉明天皇六（六六〇）年、日本の同盟国である百済が唐・新羅連合により滅亡したことを受け、斉明天皇は百済復興軍を朝鮮半島へ派遣するための宮を造ります。これが朝倉橘広庭宮（朝倉宮）です。宮の場所は確定していませんが、朝倉市の須川や山田、志波、大宰府などが

弥生時代

弥生時代は今から約二五〇〇年前、大陸から水田耕作や金属加工の技術が伝えられ、各地でクニが成立し始める時代です。筑後川とその支流である小石原川、佐田川、桂川近くの低地上や自然堤防上に集落が形成され、低地には水田が営まれます。福田台地では多くの弥生時代遺跡が確認されており、栗山遺跡で大規模な甕棺墓群が調査され、鉄戈や前漢鏡（中国製の鏡）、イモガイ製の腕輪などが出土したことで、当時の流通の広さと、特殊なものを入手できる人々がいたことがわかりました。

本市を代表する弥生時代の遺跡として平塚川添遺跡があります。弥生時代中期～古墳時代前期まで続いた遺跡で、弥生時代後期に全盛期を迎え、約三〇軒の集落を濠で囲う大集落であったことがわかっています。弥生時代の集落の様子がよく残り、当時のクニの様相がわかることから平成六年に国指定史跡に指定されました。また、古代史上最大の謎といえる「邪馬台国」と同時代の遺跡として注目され、比定地の一つになっていきます。



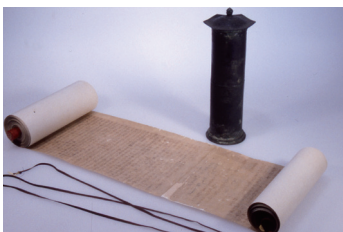
比定地になっています。斉明天皇が朝倉宮で過ごしたのはわずか二ヶ月程で、志半ばにして崩御します。葬儀の際には大笠を被った鬼が朝倉山からその様子を見ていたという伝承が残っており、朝倉山は麻氏良山一帯の山々と考えられています。斉明天皇の息子・天智天皇は白村江の戦い以後、国防のため九州各地に山城を築きます。朝倉市杷木に所在する杷木神籠石（国指定史跡）は、この時造られる山城と構造が似ていることから、同じ頃に造られたと推測されています。

奈良時代には律令制のもと、各地で郡衙（郡の役所）や寺院が整備されます。本市では、上座郡衙と考えられる八並遺跡と井出野遺跡が発見されました。須川の長安寺廃寺跡では、当時の九州の政治の中心であった大宰府で造られた瓦と同じ鬼瓦が確認されました。

平安時代には末法思想（仏教が衰退し、世の中が乱れるという考え）が浸透し、仏の教えを後世に伝え残すため、経塚が造られます。櫓原の血

経・経筒（市指定文化財）

は、平安時代後期に埋納されたと考えられ、経典は血を用いて書かれたと伝わることから血経と呼ばれています。このほか、三奈木大



古墳時代

古墳とは、土を盛り上げて造った有力者の墓で、これらが多く造られた三世紀中頃から七世紀頃までを古墳時代と言います。

平塚川添遺跡の近隣では、神蔵古墳や平塚大願寺遺跡（伝平塚大願寺塚）から三角縁神獣鏡が出土しています。また、中央（畿内）の象徴的な古墳形態である前方後円墳が各地で築造されるようになり、ヤマト王権とのつながりが窺えます。

朝倉市小田に所在する小田茶臼塚古墳（国指定史跡）は、五世紀後半に造られた前方後円墳で、古くは「クルス塚」と呼ばれていました。発掘調査では、墳丘上で行われた祭祀の跡が確認されています。菩提寺にある池の上・古寺墳墓群では朝鮮半島と関連する初期須恵器や渡来系遺物が多く出土しており、須恵器の製作技術や鍛冶、土木工事技術など当時の最先端技術を持つ渡来系の人々が埋葬されたと考えられています。また、近隣に所在する堤当正寺古墳（県指定史跡）は前方後円墳で、朝鮮半島製の甲冑と類似する甲



仏山遺跡の経塚、高山の経筒などが知られています。

杷木志波に所在する普門院は、奈良時代の創建と伝えられています。現在の本堂は鎌倉時代の建造と考えられ、福岡県最古の木造建築として国指定重要文化財になっています。本尊は平安時代中期の作と見られる木造十一面観音立像（国指定重要文化財）であり、都で造られる仏像の作風と近いことから、中央との強い繋がりが考えられています。

宮野に所在する南淋寺は、伝教大使・最澄ゆかりの古刹で、平安時代後期の作と見られる木造薬師如来坐像（国指定重要文化財）が本尊となっています。この仏像は、遣唐使であった最澄が無事に航海を終えることができた恩返しとして古処山の霊木から彫りだした七体の仏像のうちのひとつと伝わっています。

中世（鎌倉～安土桃山時代）

鎌倉時代の初め、原田種雄は鎌倉幕府から秋月の地を与えられ、秋月氏と名乗ります。元寇では秋月氏も武功をあげたと伝わっており、元寇の様子を描いた『蒙古襲来絵詞』には「筑前国御家人秋月九郎種宗」の名が記されています。秋月氏は古処山城を本城とし、杷木の長尾城など二四ヶ所に城を築き、当地を治めました。しかし、一六代当主秋月種実が豊臣秀吉の九州平定で敗れたことで、日向財部（現在の宮崎県